

# 少年剣道クラブが子どもたちにもたらす効果の一考察

～少年剣道にみる「やり抜く力」～

1170384 青野和大

高知工科大学マネジメント学部

## 1. 概要

現在、子どもの体力低下や人間関係を形成する力の低下、自制心や規範意識の低下及び、自尊感情の低下など子どもたちの成長の中で様々な問題が懸念されている。国や地方自治体はこういった問題の改善を図るために様々な政策や取り組みを行っている。その中で筆者は体系的な課外活動に注目した。体系的な課外活動の中で代表的なものといえば「スポーツ少年団」である。筆者自身も過去に地域の「剣道」団体に所属しており、現在も剣道を続けている。本研究では、筆者自身が小学生時代に所属していた「仲南少年剣道クラブ」に焦点をあてる。そして、剣道を習うことで子供たちにどのような効果があるのかを明確にしたいと考えた。

本研究では、「やり抜く力」に注目し、やり抜く力とは何か、やり抜く力がもたらす効果や伸ばす術をアンジェラ・ダックワークス著『GRIT～やりぬく力～』に記述されている内容を整理した。次に剣道とやり抜く力の関係性を調査するために、「仲南少年剣道クラブ」卒業生たちにアンケート調査を行った。アンケート調査を通して、「仲南少年剣道クラブ」卒業生たちのやり抜く力を計測した。アンケート結果を分析し、剣道を続けることとやり抜く力の関係性を考察する。そして、剣道を通して得られることはなにかを明らかにし、それを現在の子供たちの課題に当てはめ、課題に対する有効性を提示する。剣道を子ども（小学生）時代に習うことでやり抜く力は身に付き、続けることでさらに伸びていくと考える。また、剣道を続けていくことは子どもたちにおける諸問題に対して有効性があると考えられる。

## 2. 背景

現在、子どもたちの体力低下や人間関係を形成する力の低下、自制心や規範意識の低下及び、自尊感情の低下などの諸課題が懸念されている中、心身健全な子供たちの育成が重要視されている。今日では、そういった子どもたちの諸課題を取り上げたニュースや記事が多くみられ、深刻な問題となっ

ている。本研究では子どもたちの諸課題について、文部科学省のホームページの『2. 現代の子どもの成長と徳育をめぐる今日的課題』と『3. 子どもの体力の低下の原因』に記載されている内容を基に問題を提示し、まとめていく。筆者は、その中で4つの問題に焦点をあて、問題の要因を記載されている内容を基に考察する。その他、子どもたちを取り巻く多くの問題が顕在化する中、筆者は体系的な活動が子どもたちの諸課題に与える効果を考察していく。体系的な活動として、筆者が習っている剣道から考察していく。さらに「やり抜く力」というものにも注目した。アンケート調査をもとに剣道とやり抜く力の関係性を分析し、子どもたちの諸課題にも有効性があるのかを考察し、自身の体験も踏まえて検証する。

## 3. 目的

本研究では、まず子どもたちにおける諸課題の要因を考察し提示する。次に、「やり抜く力」とは何か、やり抜く力がもたらす効果や伸ばす術を概括する。そして、筆者自身が所属していた「仲南少年剣道クラブ」&卒業生を対象にアンケートとヒアリング調査を行い、それらの調査結果を分析することによって、剣道を続けることとやり抜く力の関係性を考察する。そこから剣道を通して得られることは何かを分析し、考察する。それを現在の子供たちの課題に当てはめ、剣道の有効性を考察する。

## 4. 研究方法

本研究は、はじめに、子どもたちにおける諸課題について文部科学省のホームページを元に調べ、現状及び要因を整理する。次に、ダックワークス著『GRIT～やりぬく力～』を読み、それに基づいて、「やり抜く力」とは何か、やり抜く力がもたらす効果や伸ばす術を、整理する。そして、剣道とやり抜く力の関係性を調査するために、ダックワークス著書の中に掲載されている「グリッド・スケール」を用いて、「仲南少年剣道クラブ」卒業生たちを対象にアンケート調査を行い、

グリットスコアを計測する。同時に、筆者自身が小学生時代に所属していた「仲南少年剣道クラブ」を対象にアンケート&ヒアリング調査を行い、剣道を習うことで子供たちにどのような効果があるのかを調査する。最後に、アンケート調査をもとに剣道とやり抜く力の関係性を分析する。ヒアリング調査結果、並びに自身の体験も踏まえて、剣道を続けることが子どもたちの諸課題解決にも有効性があるのかを考察する。

## 5. 結果

### 5-1 子どもたちにおける諸課題

背景で述べたように、現在、子どもたちにおけるさまざまな問題が顕在している。要因としては、社会や生活様式の変化、人々の意識変化など様々なものが挙げられる。筆者がとりあげた4つの問題として、1.「体力の低下」では、文部科学省のホームページ『3.子どもの体力の低下の原因』に記載されている内容に沿って要因をまとめる。子どもの体力の低下要因として、大きく2つのことが考えられる。1つ目の要因として、運動に対する意識変化がある。人々の意識が学力評価を重視する傾向になり、身体・精神の鍛練、道徳心、規範意識などを育てる意識が低下している。その結果、学力に比べて外遊びやスポーツの重要性を軽視する結果に繋がった。また、子どもの体力低下がもたらすさまざまな影響への認識が不十分であることも、スポーツの理解・関心への希薄化に繋がった。2つ目の要因は、子どもの生活環境の変化である。経済発展や科学技術の進展、時代が進むにつれ、生活環境が変化してきており、子どもの生活の中における日常的動作(歩く・外で遊ぶ)が減少するようになった。また、遊びの内容が外遊びから屋内遊び(ネット・ゲーム)などに変わった。結果、スポーツや外遊びの時間の減少が起こる。次に、スポーツや外遊びを行う空間の減少も挙げられる。都市化が進み、自動車が普及したことで、空き地や生活道路などが減少し、子どもたちのスポーツや外遊び空間が限られたものになった。2.「人間関係を形成する力の低下」では、主にコミュニケーション能力の低下や欠如がみられる。原因として、情報化社会による影響が考えられる。情報化の進展により、携帯電話・パソコンなどの情報機器が普及したことで、現代の子どもたちは生まれたときから情報化社会の中で育っている。その中で、インターネットを通じたコミュニケーション(SNSなど)が子どもたちに普及しており、簡単にネット上でコミュニケーションをとることができる。しかし、外での遊びや体験活

動等の機会が減少し、直接コミュニケーション(実際に社会生活の中で会話や自己表現)を行うことを苦手とする若者が増えた。また、SNSの普及により、ネット上で簡単に趣味や価値観の合う友達作りができる。しかし、学校や社会に出ると、自分と気が合う者だけでなく、多様な人物と関わらなければならない。ネット上での友達作りができて、社会の中でいろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において相互関係を深め、理解し、人間関係を構築することができない若者が増えた。3.「自制心や規範意識の低下」では、2つの要因が考えられる。1つ目の要因として、家族環境の変化が挙げられる。現在の日本は核家族化と両親の共働きが増え、子どもが一人もしくはこどもだけで家庭内にいる時間が多くなっている。それに伴って、子どもの行動を保護者が把握しきれていないという問題もあり、子どもの「しつけ」が充分できない。子どもにとってしつけは規範意識の基になる。また、保護者のしつけの内容も適切でない可能性もある。これらのことを踏まえ、家族環境の変化によって、家庭間でのしつけが不十分であることが挙げられる。2つ目の要因は地域環境の変化である。現在、社会の変化もあって、近所付き合いの減少や地域の活動に参加しない家庭も多々あり、地域間の連携も上手くとれていないどころか地域とのかかわりが極めて希薄になっている。その結果、子どもたちと地域の結びつきが希薄化し、地域連携教育が機能しなくなることで子どもは、他の大人や子どもと関わることで社会のルールを学ぶ場や機会を失っている。4.「自尊感情の低下」では、社会の変化に伴う、将来への不安が要因として挙げられる。現在の社会は様々な要因や時代の流れによって、不安定なものとなっている。例えば、真面目にコツコツ勉強し、良い学校を卒業しても必ずしも安泰は保障できず、努力が報われないなどが挙げられる。このような社会情勢・風潮の中で、子どもたちの将来に対する様々な不安が募り、将来への希望や意欲の希薄化に繋がっていると考えられる。

### 5-2 「やり抜く力」のまとめ

本節では、ダックワークス著『GRIT～やりぬく力～』の内容を基にまとめていく。まず、「やり抜く力」とは何か。『GRIT～やりぬく力～』(第1章「やり抜く力」の秘密 P23)の一文に『みごとに結果を出した人たちの特徴は、「情熱」と「粘り強さ」を併せ持っていることだった。つまり、「グリット」(やり抜く力)が強かったのだ。』と書かれている。このことから、

やり抜く力とは、「情熱」と「粘り強さ」をあわせ持つ力であることが分かる。では、この「やり抜く力」とはどのようにすれば身につくのか。ダックワークスは著書の『第11章「課外活動」を絶対にすべし』で体系的な練習が必要な課外活動は『やり抜く力』を伸ばすのに効果的ということ述べている。体系的な練習が必要な課外活動には2つの特徴があり、  
 「1. 親以外の大人の指導を受けること」「2. 興味を深め、練習に励み、目的を持ち、希望を失わずに取り組むことを学べること」だと述べている。そして、体系的な練習が必要な課外活動についてダックワークスは、第11章「課外活動」を絶対にすべし P301～302 において『「大変」なのに「楽しめる」唯一の行動』ということ述べており、ある研究で「学校の勉強は大変で、多くの子どもにとっては、本質的に面白いものではない。友達と遊んだり、メールを打つのは楽しいが、やりがいはない。課外活動（スポーツや音楽活動）は大変だが、楽しい。」という結果が得られたそうである。

では、課外活動を行う子どもたちにはどのような特徴があるのかというと、P302～303 の中で「課外活動を積極的に行っている子どもたちのほうが、課外活動をあまり行っていない

い子どもたちよりも、学校の成績がよく、自尊心も高く、問題を起こすことも少ない。」ということ述べており、課外活動を行っている生徒は様々な点で優れているということが分かる。このことからダックワークスは、「やり抜く力」とは「1つの目標にじっくりと取り組むこと」であり、「課外活動」とは「やり抜く力を身に付ける術」ということを述べている。このように、ダックワークスが述べてきたように、「やり抜く力」と「課外活動」には大きな関係性があると考えられる。

### 5-3 『仲南少年剣道クラブ』と「やり抜く力」

体系的な課外活動がやり抜く力を伸ばすのに効果的ということが分かったことにより、筆者はある仮説を立てた。その仮説とは、『仲南少年剣道クラブ（少年剣道）』はやり抜く力を伸ばすのに有効では？ というものである。仮説を立てた理由として、仲南少年剣道クラブは体系的な練習を行う課外活動であり、その特徴である 1. 親以外の大人の指導を受けること 2. 興味を深め、練習に励み、目的を持ち、希望を失わずに取り組むことを学べることが含まれているからである。また『GRIT～やりぬく力～』p270、に記述されている「厳しくしつつも温かく支える」から、剣道特有の礼儀を重んじ、

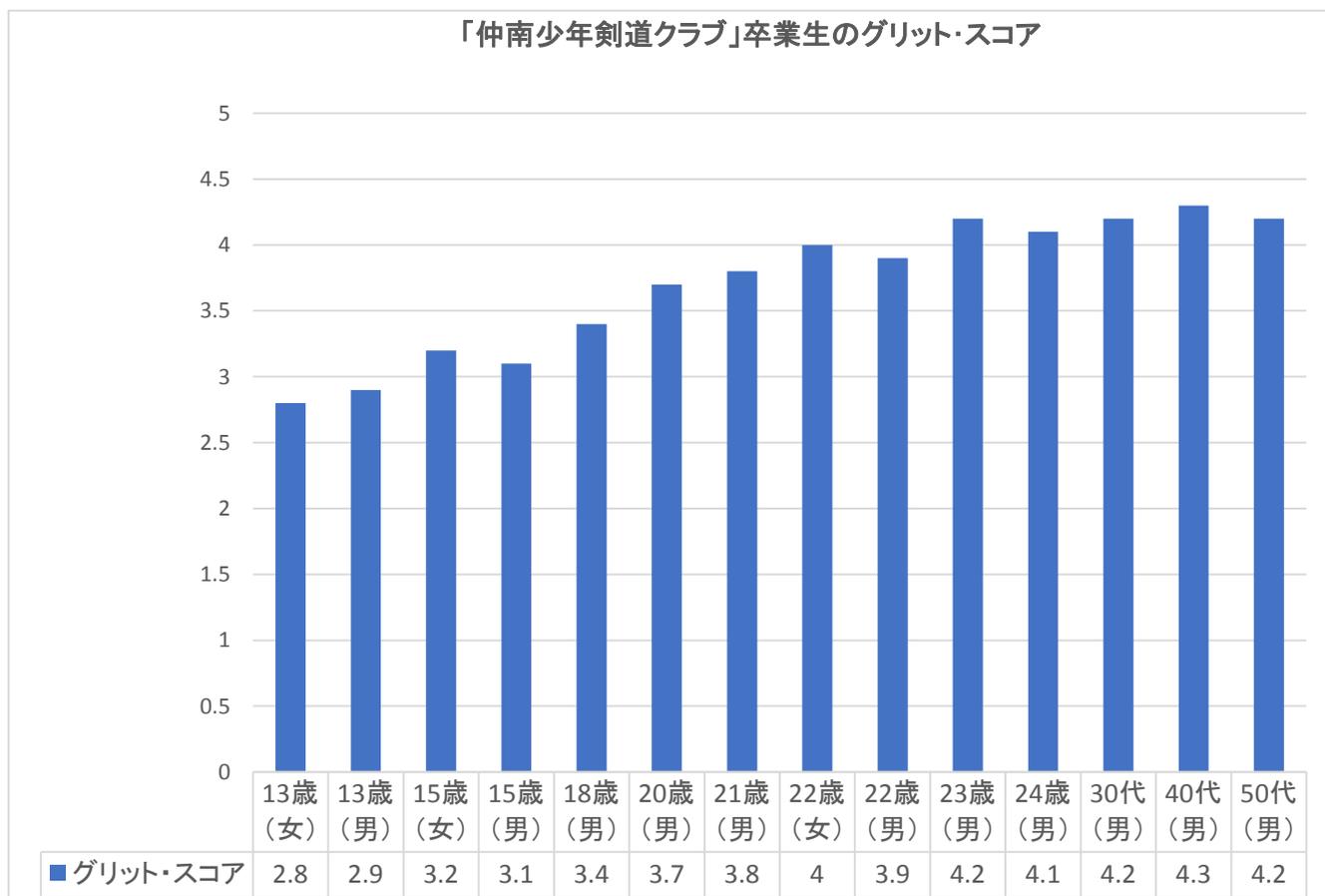


図 5-1 「仲南少年剣道クラブ」卒業生のグリット・スコア

厳しくしつつも温かく指導することも理由の一つである。仲南少年剣道クラブに所属し、体系的な練習を行うことでやり抜く力がどのように変化したのか、仲南少年剣道クラブ卒業生を対象に調査を行うことにした。『GRIT～やりぬく力～』のP84に掲載されている「グリッド・スケール」を用いてアンケート調査を行った。前ページに記載した仲南少年剣道クラブ卒業生のグリット・スコアをみると「13歳から23歳にかけては、年齢が上の人の方がスコアが高い傾向」であることが分かった。次に、仲南少年剣道クラブ卒業生の「情熱」と「粘り強さ」のスコアを比較した。グリット・スコアを「情熱」と「粘り強さ」の項目で分析した結果であるが、2つの調査結果がみられた。1つ目の結果として、「大半の人が「情熱」のスコアより、「粘り強さ」のスコアの方が高い」ということがみられた。この結果についてはダックワークスも著書でほとんどの人が「粘り強さ」のスコアのほうが「情熱」のスコアをわずかに上回っている。ということ述べている。仲南少年剣道クラブ卒業生にも同じような結果がみられた。

述べている。この結果も、仲南少年剣道クラブ卒業生たちにみられた。2つ目の結果は、「20歳以上になると「粘り強さ」のスコアは4点を超えており、その後も、4点以上の高スコアを出している。」ということである。このような結果を踏まえると、多くの人にとって、「情熱」のスコアを伸ばすことは、「粘り強さ」のスコアを伸ばすより難しいのだと筆者は考察した。このような結果から、ダックワークスは著書で「比較的、必死に努力したり、挫折から立ち直ったりすること（粘り強さ）よりも、長い間、同じ目標にずっと集中し続けること（情熱）のほうがはるかに大変なことなのだということが分かる。」ということ述べている。仲南少年剣道クラブ卒業生のグリット・スコアから以上の結果がみられた中で「仲南少年剣道クラブ卒業生の13歳から23歳にかけては、年齢が上の人ほどスコアが高い傾向である。」という結果に着目した。そこで、グリット・スコアと年齢にはどのような関係性や要因があるのか」という疑問が生じた。そこで、ダックワークスの著書の中で「やり抜く力」の要因についての項目をみる

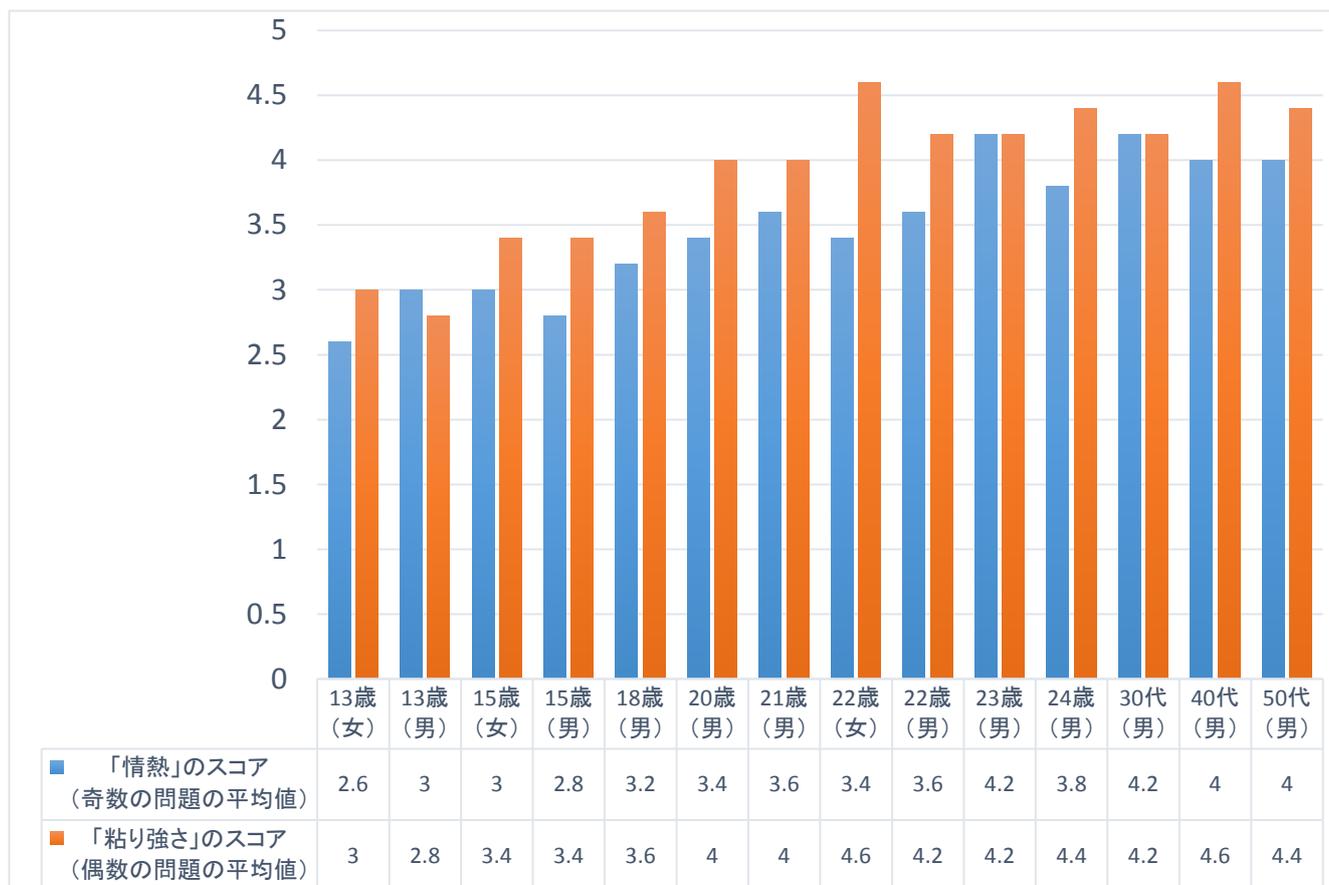


図5-2 「情熱」と「粘り強さ」のスコア比較表

そして、ダックワークスは、「情熱」のスコアが高い人は、「粘り強さ」のスコアも高いはずで、逆もまた然りといえる。と

と、要因として1.「育つ時代の文化的な影響を受ける」2.「年齢ともに強くなる」という2つの要因があることが分

かった。今回は2.「年齢ともに強くなる」に注目し、考察した。次節では、今回の調査結果が生じた理由を検討する。

#### 5-4 『仲南少年剣道クラブ』卒業生の特徴

仲南少年剣道クラブの卒業生の特徴として、高校生まで剣道が続いている人が多いということが挙げられる。高校生まで剣道が続いている人が多い要因として3つ考えられる。1つ目の要因は「指導要因」である。仲南少年剣道クラブの指導要因には2つのポイントがある。その第一は指導方針である。仲南少年剣道クラブの指導は基本重視であり、剣道の基礎づくりを主に行う。そのため、試合ですぐに結果を出すことは難しいが、基礎が出来ているために中学生・高校生になって技術が伸びる。そのため、仲南少年剣道クラブの卒業生は中学生・高校生になって活躍する選手が多い。2つ目は信頼関係である。親子と先生、先生と先生の信頼関係が強いという特徴がある。その理由として、実績のある先生が指導しているということ。そして、仲南少年剣道クラブの先生と中学と高校の先生同士の指信頼関係があるというのもポイントの1つである。剣道が続ける第二の要因であるが、「繋がり」が挙げられる。仲南少年剣道クラブの卒業生たちにとって、仲南少年剣道クラブは居場所であり、帰ることができる場所であると考えられる。剣道が続けることで大会・稽古会等で先生方や仲間と会うことができ、成長した姿を恩師に見せることが出来、互いの成長を見ることが出来る。このように、剣道が続けることで、稽古会等で仲南少年剣道クラブに行く機会があり、そこで恩師や仲間と繋がりがあということが挙げられる。剣道が続ける第三の要因として「費用」や「費やした時間」が挙げられる。剣道は他の競技に比べ、防具や竹刀など費用が掛かる。そういったこともあり、なかなか剣道を始めにくいということが考えられる。しかし、始めてみると費用などを考慮した場合、今度はなかなかやめにくいことも考えられる。また、剣道は独自の競技で他の競技のように他の競技との共通点といったものがあまりみられない。例を挙げるとすれば、中学時代に陸上で100m走などの走る競技をしていた人物が走る速さを買われ、高校に入学して野球部に入るといったケースはある。しかし、剣道から他の競技に移る際、競技内容の中に他の競技との共通点がほとんどみられず、剣道を辞めて他の競技に替わることが少ないことが考えられる。そしてこの様子は、剣道が続けた年数が長い程多くみられる。これら3つの要因が、仲南少年剣道ク

ラブの卒業生が高校生まで剣道が続いている要因であると考察する。

#### 5-5 「やり抜く力」の向上理由と剣道の関係性

体系的な課外活動として自身が所属していた少年剣道を取り上げてきたが、実際に剣道がやり抜く力の向上とどのように関係しているのかダックワークス著『GRIT～やりぬく力～』の記述を踏まえて考察すると、剣道のやり抜く力に対する優位性として、2つの要因が考えられる。1つ目の要因は、『GRIT～やりぬく力～』のp187の一節に「目標設定➡クリアを繰り返し続ける」という記述である。この内容を剣道に当てはめると、「強い打ちができるようになりたい」「スピードを上げたい」など目標を設定し、練習を繰り返し行うことで目標をクリアすることができる。上手くいかなかったり、つらい時もあるが、努力を続けることで成果が表れる。成果の実感としては「周りの評価」や「試合に勝つ」などの結果が挙げられる。この事から、ダックワークスの言葉を借りてまとめると、「努力し、目標をクリアすることを経験すると、努力に関する主体的経験は変わっていく。目標を達成し、努力が報われることで、達成感や目標に向かって努力する喜びを学び、苦しくてもまた頑張れる。」ということがわかる。よって1つ目の要因は、剣道を通し、目標を設定して稽古を繰り返し行い、目標を達成することで、つらい時もあきらめずに続けられる信念「自尊心」が育まれ、やり抜く力につながる。また、繰り返し練習を繰り返すことで「体力の向上」も見込める、と整理できる。2つ目の要因は、『GRIT～やりぬく力～』のp334の一節に「周りの価値観が“自分の信念”に変わる」という記述がある。ダックワークスは著書の中で、『「文化には長期的に私たちのアイデンティティを形成する力がある」長期的に条件がそろえば、自分が所属する集団の規範や価値観は、やがて自分自身の規範や価値観となる。自分の一部となり、つねについてまわる。集団の流儀や信念だったものが、自分自身の流儀や信念になるのだ。』と述べている。この内容に即して、剣道の特徴を述べると、剣道クラブに所属することで剣道の礼儀や規範意識、心身を鍛錬することの大切さを学び、稽古を続けていく中でそれらが自身に備わり、信念となる。剣道には「守破離」という教えがあり、子ども時代は「守」にあたり、師の教えを守り、様々な事を学ぶところである。ここから「破」「離」に進むために鍛錬を積む。それがやり抜く力につながると考察する。ここでは「人間関係」が大きな

影響力をもち、剣道の環境の中で稽古を続けていくことで「礼儀作法」や「規範意識」が身に付き、「心身の向上」が期待される。

## 5-6 剣道を続けることで得られることの考察

5-5でやり抜く力の向上理由と剣道の関係性を考察したわけであるが、その中で剣道をおこなう事によっていくつか得られるものがあると考察した。大きく4つの内容に分ける。1つ目は「礼儀」である。礼儀を大切にするのは武道ならではのであり、特に剣道は礼儀を重んじる。剣道といえば「礼に始まり礼に終わる」といわれるように、普段の稽古ではもちろんの事、試合の際も礼節を行う。この剣道の基本ともいえる礼儀であるが、剣道を始めるにあたり、最初に習う事である。この礼儀は、ただ形だけにとらわれることなく、相手を敬う心を尊敬の念の表現とする。そして、剣道をおこなう中で、礼が身につくように心がけ、続けていくと自然に礼が表れるようになる。剣道の稽古の中には様々な礼節の場面があり、日々の稽古のなかで養うことができる。そして、礼儀作法が身に付くと同時に、規範意識なども養うことができる。2つ目は「社会性」である。剣道は仲間と協力し、互いに敬意の気持ちを持ち、稽古に取り組むことで協調性を学ぶことができる。また、剣道の特徴として、老若男女問わず、幅広い年齢層の方と剣を交え、接することによってコミュニケーション能力が身につく。剣道は幅広い年齢層の方と剣を交え、交流を深める機会（合同稽古・初稽古・稽古納め）が多くあり、様々な人が同じ空間で気軽に楽しみ、交流を深めることができる。これは、剣道ならではののものであり、醍醐味の1つであると考え。筆者自身、これまでの剣道人生において多くの方々と出会い、多くのことを学んだ。また、人と話すことが好きになった。このように剣道をおこなう事で社会性（コミュニケーション能力）が身に付くと考える。3つ目に「精神力の向上」である。剣道の稽古をおこなうにあたり、稽古を積み重ねていく上で、(苦しい、痛い、暑い、寒い)などの苦難がある。稽古では、道義や袴の上に防具をつけ、顔には面を被る。ただでさえしんどい練習に加え、そういった動きづらい格好をするので、稽古はより一層苦しいものになる。また、竹刀という竹の刀で打たれるため、経験を積みれば多少は慣れるものの、打たれると痛い。技が外れてあざができるなどは稽古のなかで日常的にあり得る。そして何より、夏は暑く、冬は寒い道場での稽古は大変である。夏は暑さに加え、

防具をつけて稽古をおこなうのだから暑さは陰しさを増す。冬は防具に問題ないとしても、寒い中で素足での稽古は辛いものである。それらを我慢して、やめないで続けること自体が剣道ならではの稽古ともいえる。こういった経験を通して強い精神力が養われる。4つ目は「身体能力の向上」である。剣道は姿勢からといわれることも多いように、剣道の基礎基本として正しい姿勢が求められる。正しい姿勢とは剣道でよくいわれる自然体というものであり、背筋が伸びて無理のない姿勢の事である。この正しい姿勢（自然体）は医学的にも正しい姿勢であると証明されている。剣道を行う上で切っても切り離せないものが姿勢であり、稽古のみならず、正座や礼の際も正しい姿勢が求められる。また、稽古の中では、正しい姿勢に加え、剣道の面や小手、胴などの技を打つ際の「打つ」動作、突き打ちなどの「突く」動作、そして、相手の技をかわす「捌く」という動作を繰り返す。その結果、注意力や観察力を養うとともに、敏しょう性や瞬発力、持久力を養うことができる。また、剣道は一瞬で勝負が決まってしまう競技であり、そのことから集中力も養うことができる。以上の事から、剣道を習う事で4つの効果を得られると考察する。

## 5-7 仲南少年剣道クラブの現役生・卒業生の希望・感想

5-6節で剣道を続けることによって得られることを考察してきたわけであるが、仲南少年剣道クラブに所属している現役生や卒業生、保護者や先生に剣道を続ける上での感想について調査を行った。ここでみるのは先ほど考察した、剣道を続けることで得られることが、実際に調査対象の人々が剣道を通して得られたと感じているかどうかである。ヒアリング調査では、「仲南少年剣道クラブに入団して良かったこと(成果)や想い」について自由に答えてもらった。それらを項目に分け、当てはめていく。ヒアリング調査の対象者は、仲南少年剣道クラブに所属している現役生10名、卒業生4名、かつて自身も仲南少年剣道クラブに所属していた保護者6名、先生2名の計22名である。ヒアリング調査結果を仲南少年剣道クラブの希望・感想の概要として表にまとめると以下のような結果となった。まず、先生の指導に対する思いに着目すると、先ほど5-6節で考察した道で続けることによって得られること[1. 礼儀、2. 社会性(交流)、3. 精神力、4. 体力・技術]が含まれていることが分かる。次に、入団前の項目から見ると、現役生・卒業生・保護者と年を経ることで○のつ

いた項目が多くなっているのが分かる。入団前の想いでは、5-5節で述べた剣道から得られることにほとんど〇がついて

おらず、「強くなりしたい」や「(他校の子と)仲良くなりしたい」などに〇がついている。

表 5-1 仲南少年剣道クラブの「希望・感想の概要」

	入団前(希望)	現役生	卒業生	保護者	先生
勧められて	〇				
強くなりしたい	〇	〇	〇	〇	〇
仲良くなりしたい (社会性)	〇	〇	〇		〇
他世代との交流 (社会性)			〇	〇	〇
体力・技術		〇	〇	〇	〇
礼儀			〇	〇	〇
努力・忍耐・精神力				〇	〇

しかし、入団後に先生からの指導を受け、稽古を積んでいき、卒業してからも剣道を続けていくことで、〇のついた項目が増えており、この事から、先生の指導に対する思い(剣道から得られること)[1. 礼儀、2. 社会性(交流)、3. 精神力、4. 体力・技術]が身についたと感じていると分かる。

## 6. 結論

5章で分析した結果、「剣道はやり抜く力の醸成に対し、有効性があるのではないか。」と考察する。その第一の理由として、「目標設定➡クリアを繰り返し続ける」を挙げる。剣道をおこなう中で目標を設定し、稽古を繰り返し行い、目標を達成することで、つらい時もあきらめずに続けられる信念「自尊心」が生まれ、やり抜く力につながる。第二の理由として、「周りの価値観が“自分の信念”に変わる」を挙げる。剣道クラブに所属することで剣道の礼儀や規範意識、心身を鍛錬することの大切さを学び、稽古を続けていく中でそれらが自身に備わり、信念となる。剣道には「守破離」という教えがあり、子ども時代は「守」にあたり、師の教えを守るところである。ここから「破」「離」に進むために鍛錬を積む。それが“やり抜く力”につながる。上記の理由から、「剣道はやり抜く力に対し、有効性があるのではないか。」と考察する。

## 7. 子供たちの課題に対する剣道の有効性

5-1で子どもたちにおける諸課題を提示した。そして、その後に剣道から得られることをヒアリング調査結果から考察した。そもそも剣道の理念とは何かというと、『全日本剣道連盟』のホームページでは「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」とされている。そして、剣道剣士の多くが所属し、メジャーな団体として『全日本剣道道場連盟』というものがある。剣道ならではのものであるが、子どもたち(小・中学生)は大きく3つの場所のいずれかに所属し、剣道をおこなっている。1つ目が最も所属数が多い、『全日本剣道道場連盟』に所属している「道場」である。2つ目は、他の競技も多く所属している「スポーツ少年団」である。3つ目に筆者が所属していた「剣友会」である。いずれも多少は違いがあるが、「剣道の修練による青少年の心身の健全な育成」を掲げている。筆者が所属していた仲南少年剣道クラブの理念は「剣道を通して健全なる青少年の育成」を掲げており、「古くから仲南で盛んであった剣道。町技ともいえる剣道を通して、地域一丸になって子どもたちの健全な成長に携わりたい」という想いが込められている。このように、剣道を通して青少年の育成をおこなっていることから、剣道は子どもたちの成長の上で有効性はあると考える。また、5-5節「やり抜く力の向上理由と剣道の関係性」と5-6節「剣道を続け

ること得られること」で考察した内容を子どもたちの課題に当てはめて考察する。子どもたちの諸課題の1.「体力の低下」についての有効性として、正しい姿勢に加え、剣道の打つ・突く・捌くという動作を繰り返し行うことで、注意力・観察力を養うとともに、敏しょう性や瞬発力、持久力を養うことによって体力の向上が見込めると考察する。2.「人間関係を形成する力の低下」についての有効性としては、剣道の特徴でもある、幅広い年齢層の方と一緒に稽古は他の競技とは違い、老若男女問わず、幅広い年齢層の方と剣を交え、交流を深める機会(合同稽古・初稽古・稽古納め)が多くあり、接することによってコミュニケーション能力が身につく。このような経験から社会性(協調性)を育むことができる。老若男女問わず、様々な人が同じ空間で気軽に楽しみ、交流を深めることができるのは、剣道ならではのもの。筆者自身、剣道をはじめ、多くの方々と出会い、接することで多くのことを学び、人と話すことが好きになった。よって、人間関係を形成する力(コミュニケーション能力)の向上が見込めると考察する。3.「自制心や規範意識の低下」についての有効性として、礼儀を学び、稽古を重ねていくことで正しい人格形成を目指す剣道。「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」と全日本剣道連盟が記しているように、人間形成を目的としている。このことから、剣道を続けることで、「道徳観」が育てられ、剣道家として規律のある社会行動や考え方が養われると考える。よって、自制心・規範意識の向上が見込めると考察する。4.「自尊感情の低下」についての有効性は、子ども(学生)の時期に大会などの試合を目標とし、練習に励むことが大切である。その結果、試合に向けて努力することや試合で勝つこと、挫折を乗り越えることで、努力する大切さや、結果が出た時の喜び、自信に繋がり、自尊感情を養うことができる。よって、自尊感情の向上が見込めると考察する。このように、剣道は「やり抜く力」に対して有効であり、剣道を続けることで得られる効果は子どもたちの諸課題(1. 体力の低下 2. 人間関係を形成する力の低下 3. 自制心や規範意識の低下 4. 自尊感情の低下)にも有効性があるのでは。と考察する。

## 7. 今後の課題

今回の研究を経て、以前まで曖昧であった剣道の有効性をまとめ、認識することができた。そして、剣道をおこなうことで様々な効果を得られるのではないかと感じた。平成24年

度から中学校では保健体育の授業に武道が正課として加えられ、中でも剣道と柔道は主におこなわれている。このことから武道(剣道)が子どもたちの健全なる育成に有効性があると考えられる。また、日本の伝統文化として大切にしていかなければならないものであると考える。現在、少子高齢化が進み、子どもの人口が減っている。さらには、従来より人気であった野球などに加え、サッカーやテニスなどのスポーツに人気や関心が向けられるなか、剣道をはじめとした武道の競技人口の減少は著しい。日本の伝統文化であり、礼儀を学ぶことができ、心身の健全な育成を見込める剣道の魅力を多くの人々に認知してもらえるようなPR活動を行っていくべきであると考えられる。そして、筆者自身が所属していた仲南少年剣道クラブをはじめとした地域の中に存在する剣道クラブや道場をいかにして次の世代に繋げていくかが大切であると考えられる。剣道の魅力を伝えていくのは然ることながら、剣道をおこなっている人々の「想い」を大事にし、伝えていくことがこれからの剣道普及に繋がっていくのではないかと思う。そして、その「想い」が地域と子どもを繋げ、日本の伝統文化の継承となり、日本の伝統文化である剣道による、これからの時代を担う子どもたちの育成に繋がると考える。このような事が上手くおこなえれば、日本の伝統文化である剣道(武道)によって、礼儀を重んじ、他者を思いやれる日本人らしさ・日本人としてのアイデンティティを次世代に繋いでいくことが出来ると思える。

## 参考・引用文献

- 【1】 アンジェラ・ダックワークス著  
『GRIT～やりぬく力～』2016 ダイヤモンド社
- 【2】 2. 現代の子どもの成長と徳育をめぐる今日的課題：文部科学省  
([www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/.../1286155.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/.../1286155.htm))
- 【3】 3 子どもの体力の低下の原因：文部科学省  
([www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/.../1344534.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/.../1344534.htm))
- 【4】 全日本剣道連盟  
([www.kendo.or.jp/](http://www.kendo.or.jp/))
- 【5】 剣道の理念  
([www.geocities.jp/asidachi2004/kendokiyoshitu/rinen.htm](http://www.geocities.jp/asidachi2004/kendokiyoshitu/rinen.htm))